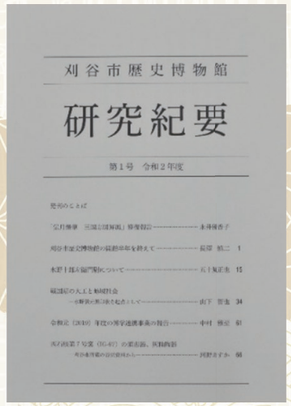
episode1 水野“十郎左衛門尉”信元

史料に登場する「水野十郎左衛門尉」は、これまで信元弟の信近だと考えられてきました。

しかし近年、信近は一貫して「藤九郎」を名乗っていたことが明らかになりました。さらに、当時の史料で「水野十郎左衛門尉信正」と見える人物は信元養子の元茂ですが、通称（官途名）は家系ごとに代々同じものを名乗る場合が多いことから、この嫡男・元茂が「十郎左衛門尉」を名乗っているということは、その養父である信元も同じ「十郎左衛門尉」を名乗っていた可能性が高いと指摘されています。

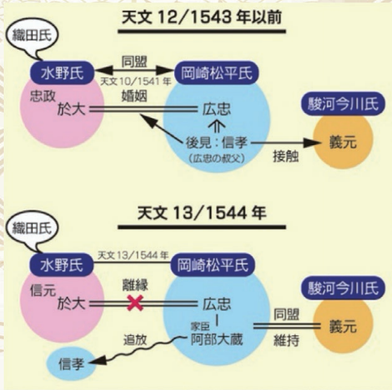
これらのことから天文元～永禄3年（1532－60）頃の政治情勢の中で「十郎左衛門尉」を信元として読み直していくことで、今後も信元の人物像は見直しが進んでいくものと考えられます。

参考：五十嵐正也「水野十郎左衛門尉について」（『刈谷市歴史博物館研究紀要』第1号、2021年）



▲研究紀要はこちら

episode2 於大の離縁



天文13年（1544）、於大が幼き竹千代（のちの家康）を残して松平広忠と離縁させられました。これまでは父・忠政の跡を継いだ信元が方針転換をして織田氏についたことが離縁の理由として通説になっていましたが、このことは現在、見直されてきています。

離縁となる天文13年以前の岡崎松平家中は当主広忠の下で一枚岩となっていたわけではなく、その後見役・信孝の存在がありました。

広忠の叔父・信孝は、於大と広忠の婚姻により水野氏との同盟を成立させます。

一方で信孝は、天文12年、牛久保（豊川市）の牧野氏支援のため東三河に勢力を伸ばしていた駿河・今川義元の下にも出向き接触を試みていました。

広忠側近の阿部大蔵らは、信孝の権限の増大を危惧しクーデターによって信孝を追放します。また、水野氏との同盟が続いてしまうと、同盟の立役者である信孝を復帰させることにもつながるため、於大を離縁させ刈谷に帰すという選択をしたとされています。つまり、単純に信元が原因というわけではなかったのです。

さらに、この時期にはまだ織田氏と今川氏の敵対の事実が確認できないことや、この後も信元の使者が駿河今川氏の下に赴くなど、松平氏を囲う織田氏・水野氏・今川氏の関係は保たれていたこと、追放された信孝により反広忠勢力が形成されていたことなどが明らかにされてきており、どちらかというと於大離縁の選択は、松平家中の課題解決の中で生まれたものと考えられるようになってきています。

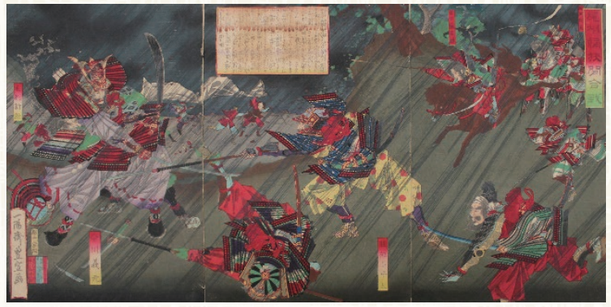
▲於大が離縁した後に生活した椎の木屋敷

参考：小川雄「今川氏の三河・尾張経略と水野一族」（戦国史研究会編『論集　戦国大名今川氏』岩田書院、2020年）、柴裕之「青年家康　松平元康の実像」（角川選書662、2022年）

episode3 桶狭間の戦いでの水野信元

永禄3年（1560）の桶狭間の戦いでは、松平元康（のちの家康）は今川方として大高城に兵糧を補給する任を遂げました。一方、水野氏の所領では、今川方の武将・岡部元信が駿河への退却の際、刈谷城を攻撃し、信元弟の信近が亡くなっています。

桶狭間の戦いに関する最新の研究では、「大野・小河衆」が大高の南に配置されたとの記述（天理図書館本「信長記」）から、大野佐治氏と水野氏の軍勢が海城・大高城南の海上に備えていたことが指摘されています。この時の信元の居所は依然として不明ですが、海上の軍勢を指揮できる場所と考えると船上か、あるいは緒川を離れ知多半島の西側に出陣していたことが想定されます。



▲尾州桶狭間合戦（歴史博物館蔵）

桶狭間の戦いでの信元と元康の動向や知多半島周辺の情勢はまだ不明なことも多く、今後もさらなる研究の進展が期待されます。

参考：服部英雄「桶狭間合戦考」（名古屋城調査研究センター研究紀要』第2号、2021年）

注目

大河ドラマ関連エピソード

読めばさらにドラマが楽しめるかも！

episode4 隠された信元の活躍 ～三河一向一揆の和睦～

永禄6～7年（1563－64）に起きた三河一向一揆は、今川氏から独立した家康が「どうする」べきか判断や対応に迫られた最初の大きな出来事です。この一大事に際して、伯父・信元は「どうしていた」のでしょうか。実は、信元は一揆の和睦に尽力していたことが明らかにされています。

軍記物として後世にまとめられた大久保忠教著「三河物語」には、小豆坂への出陣の際、信元が陣中見舞いに訪れたものの、家康は事態急変の報せを受けて会見を中断して急ぎ出陣したと記されています。この陣中見舞いは、当時一揆方であった渡辺守綱の話をまとめた「守綱記」に「一揆御和睦、水野下野殿扱いにて相済み申し候」（「一揆の和睦は信元の取成しによって成立した）とあることから、実際は信元による和睦勧告であると指摘されています。

家康を神君と仰ぐ松平一族や家臣にとっては、伯父とはいえ隣の領主である水野信元の介入は、その統治能力に疑問を投げかけることになってしまいます。徳川将軍家の正当性を示すことを第一とする歴史観を「松平・徳川中心史観」と呼んでいますが、信元の活躍はこれによって改変され、隠されてきたのです。

参考：村岡幹生「永禄三河一揆の展開過程―三河一向一揆を見直す」（新行紀一編『戦国期の真宗と一向一揆』吉川弘文館、2010年。のち柴裕之編著『シリーズ・織豊大名の研究一〇　徳川家康』戎光祥出版、2022年に収録。

歴史博物館　令和5年度秋期企画展のご案内

姫たちの想い ―家康を支えた水野家の女性たち―

家康の生母・於大や、三河本願寺教団の赦免に尽力した叔母・妙西尼、水野勝成の妹で養女として加藤清正に嫁いだ清浄院など、家康を支えた水野家の女性たちについて紹介します。

▲伝通院調度品【市指定文化財】（楞厳寺蔵）